

# 1898年イタリアの民衆反乱

横 山 隆 作

## 1. はじめに

1898年にイタリア各地で勃発した民衆反乱は、いまだに謎の多い歴史的事件である。

20年ほど前に筆者は、1898年の民衆反乱の社会経済的基礎条件として、イタリアの独立・統一（リソルジメント）以後の資本主義の発達の中での農民層分解と農民のプロレタリア化の進行、19世紀末大不況の中での大衆の窮乏、そして1898年の穀物およびパン価格の騰貴の三つをあげた。このような理解はあまり大きな誤りではないであろうと、現在でも筆者は考えているが、社会経済的基礎条件を理解しただけでは事件の原因や歴史的意味を把握したことにはならない。<sup>1)</sup>

かつて筆者は、この1898年の民衆反乱は、イタリアにおける研究の進展・資料の発掘によって、少なくとも出来事の詳細だけは将来明らかになるものと思っていた。若干の新しい文献・資料が公刊されたが（筆者の怠慢によって重要な文献を見落しているかもしれないが）、新しい文献を見ても、この事件の研究には基本的な困難があることを再確認させられることが多かった。まず研究の基礎となる事件記録は、当時の新聞記事、関係者の備忘録的記録や回想録、裁判記録・警察記録などであるが、これらの記録は、大変簡単なものであったり、ごく一部分のものであったり、誤っていたりして、事件を客観的かつ全体的に把握するには不十分なものが多い。この事件に限らず、多数の人々が参加した自然発生的事件というのは、記録すること自体が難しく、またそれを集めることも難しいのである。

さらにまたイタリアの研究者のこの事件のとらえ方の違いによっても、筆者は惑わされる。例えば、筆者が20余年前に読んだデルカッリア（Renzo Del Carria）の著作『Proletari senza rivoluzione 革命なきプロレタリア』の論調は、この1898年の民衆反乱は、自然発生的ではあったが巨大なエネルギーを持った数多くの民衆反乱の集合であって、これにたいして政府は軍事弾圧しか対策をもたず、したがって革命的危機であったのだが、イタリア社会党はこの危機を社会革命に転化する戦略を持たなかったという一種の「裏切り史観」に近いものであ

った。<sup>2)</sup>

これに対して、カナヴェーロ (Alfredo Canavero) の著作『Milano e la crisi di fine secolo ミラノと世紀末危機』におけるミラノの事件についての論調はかなり冷淡であって、民衆は市内にいくつかバリケードを作ったが、武器らしい武器を持たなかったから軍隊に抵抗できなかったし、また軍隊に抵抗した者は少数であった。ミラノにおける100名余の死者は、軍隊と民衆の市街戦によるものではなくて、軍隊がむやみと発砲したために多くの市民が犠牲となったものであって、大部分の市民は家にとじこもったり、仕事に出たりしており、民衆の革命的な戦闘精神が発現したとは思えないという印象を与えるものであった。<sup>3)</sup>

さらにレヴラ (Umberto Levra) の著作『Il colpo di stato della borghesia ブルジョアジーのクーデター』は、民衆反乱そのものを問題の中心にするのではなくて、1898年5月の三都市・地域の戒厳令と諸政党・労働団体への大弾圧を中心にして、これを「ブルジョアジーのクーデター」として把握しようとするものである。レヴラのこのような視点・論点の移動には、おそらくは民衆の自然発生的反乱そのものよりも社会党や労働組合への弾圧のほうがより歴史的に重い意味を持つという判断がそこにあるように思えるが、そうであるとして小生にはいささかのみこめないものがある。<sup>4)</sup>

本稿は小生の基本的研究課題である19世紀末から20世紀初頭のイタリア労働運動史研究の一部であって、かつて発表した論文と内容において一部重複するところがあり、また事件記録の信憑性について確信を持てない部分もあり、さらに結論を明確にしえないこともあり、これらの点についてあらかじめ読者諸兄に御海容を願う次第であるが、ただ事件記録だけでも整理する必要があると思うのである。

## 註

- 1) 拙稿「イタリア資本主義の発達と大衆運動」、慶応義塾経済学会『三田学会雑誌』第66巻1号、1973年1月、68～81頁。
- 2) Renzo Del Carria, Proletari senza rivoluzione. Storia delle classi subalterne italiana dal 1860 al 1950, vol.I, Oriente, Milano, 1966, pp.300-333.
- 3) Alfredo Canavero, Milano e la crisi di fine secolo 1896-1900, SugarCo, Milano, 1976.
- 4) Umberto Levra, Il colpo di stato della borghesia. La crisi politica di fine secolo in Italia 1896/1900, Feltrinelli, Milano, 1977.

## II. パン価格の高騰

1897年のイタリアの小麦収穫量は約239万トンで（表1参照）、これは1881年から1900年までの期間の平均収穫量の7割弱という大凶作であった。1897年の夏には早くも冬季の飢饉とパン価格の高騰が予測された。イタリア社会党は、当時小麦1キンタール（1 quintale=100 kg）当たり7.5リラの高率であった穀物輸入関税の撤廃、食料品への地方税の廃止、地方自治体によるパン価格統制、穀物投機の禁止と取り締まりを要求するキャンペーンを開始していた。しかし政府には穀物市場に介入する政策はなかった。

パン価格の高騰とともに失業問題もまた深刻であった。19世紀末大不況とその中での何度かの深刻な景気後退は多くの失業者を生み出していた。失業者とその家族の「パンと労働 pane e lavoro」を求めるデモがイタリア各地でしばしば行われていた。

勤労者家庭における収入と食費について若干の数値をあげてみる。

下級の国家公務員の年収が1,000リラないし1,200リラである。<sup>5)</sup>

大都市で働く熟練した建築労働者の年収は、本人が750リラ、家族4人の収入を合わせて1500リラ程度（1901年に）であったという。<sup>6)</sup>

1897年から1902年までの期間の工業における成人男子労働者の1時間当たり平均賃金は26チェンテージミであり、1日10時間労働、年間240日就労として簡易に計算すると、1日の賃金が2.6リラ、年間収入624リラになる。<sup>7)</sup>

シチリアのラティフォンド地帯の農業日雇労働者は、イタリアの中でも特に低賃金であるが、年間200リラないし300リラの収入しかない。

一方食費を考えてみると、19世紀末に全生計費中の食費の割合（エンゲル係数）は、勤労者の中位ないし上位の収入の世帯で65パーセント程度であったと推定される。<sup>8)</sup>したがって多くの都市勤労者世帯の1日の生計費は2リラから4リラの間にあって、その内の食料費は1日に1.3リラから2.6リラ位の幅の中にあつたと考えられる。パン価格が1キログラム当たりで10チェンテージミ（100 centesimi=1 lira）上がることは生活の直接の脅威なのである。

パン価格は、ミラノで1897年4月末に1リブラ（=800グラム）当たり約30チェンテージミ（1キログラム当たりに換算すると37.5チェンテージミ）であったものが、5月末には34チェンテージミ、7月末には36チェンテージミ、1898年1月には38チェンテージミ（すなわち1キログラム当たり47.5チェンテージミ）に上昇した。<sup>9)</sup>

地方では、イタリア南部のカラブリア州、カタンザーロ（Catanzaro、カタンザーロ県）で、1898年1月にパン1キログラム当たり30チェンテージミであったものが、同年4月には34チェンテージミに上昇した。<sup>10)</sup>

表1 小麦価格・パン価格等の推移<sup>11)</sup>

年	軟質小麦 卸売価格	硬質小麦 卸売価格	米国産軟小 麦輸入価格	パン 価格	パスタ 価格	小麦収 穫量	公安関係 犯罪件数
	100kg当りリラ			kg当りリラ		万トン	
1891	24.60	24.92	23	0.38	0.53	389	14,353
1892	24.32	27.17	21	0.40	0.53	318	15,849
1893	21.08	23.56	17	0.37	0.51	372	16,107
1894	18.77	20.39	14	0.34	0.48	344	16,609
1895	20.30	28.04	15	0.35	0.47	324	15,271
1896	22.04	23.37	16	0.34	0.47	399	16,094
1897	25.50	23.73	19	0.35	0.50	239	16,251
1898	26.07	27.99	23	0.38	0.51	378	19,199
1899	24.16	27.01	18	0.38	0.52	379	16,994
1900	24.48	26.40	20	0.38	0.51	390	16,970
1901	25.03	25.46	18	0.37	0.51	481	16,757
1902	23.59	24.80	17	0.36	0.50	399	17,022
1903	23.12	23.53	16	0.36	0.47	538	16,022
1904	23.12	22.87	17	0.34	0.46	490	17,087
1905	25.16	24.88	18	0.34	0.47	514	17,395

## 註

- 5) Istituto centrale di statistica (ISTAT), Sommario di statistiche storiche italiane 1861-1955, ISTAT, Roma, 1958, p.205, Tav.107.
- 6) Francesco Saverio Rotili, L'organizzazione sindacale edilizia dalle origini all'inizio del secolo (1886-1902), Bulzoni, Roma, 1989, p.129.
- 7) Cesare Vannutelli, Occupazione e salari dal 1861 al 1961, in AA.VV., L'economia italiana dal 1861 al 1961, Giuffrè, Milano, 1961, p.568.
- 8) Gaetano Rasi e AA.VV., Annali dell'economia italiana. vol.4, IPSOA, Milano, 1981, p.391, Tav.8 から計算した。
- 9) Canavero, op.cit., p.148.
- 10) Giuseppe Masi, Socialismo e socialisti di Calabria (1861-1914), Meridionale, Salerno-Catanzaro, 1981, p.93.
- 11) 軟質・硬質小麦卸売価格は, ISTAT, Sommario di statistiche storiche ---1861-1955, op.cit., p.173. 米国産軟(軟質)小麦輸入価格は, ibidem, p.192. パン・パスタ価格(消費者物価)は, ibidem, p.196. 小麦収穫量は, ibidem, p.106. 公安関係犯罪件数は, ibidem, p.93 から「公権力に対する暴力・抵抗・侮辱」と「公共秩序に違反」を合計した数値。

### Ⅲ. 1898年1月・2月

1898年1月、「パンと労働」を求める民衆の反乱がイタリア全土で爆発的に起こった。

1898年1月2日、シクリアーナ（Siculiana, シチリア, アグリジェント県）では、農業労働者を中心とする民衆が「パンと労働」「我々は公有地分割を望む」と叫んでデモを行い、市役所に侵入し、官憲の発砲によって死者1名を出す事件がおこった。<sup>12)</sup> 同じく1月2日、チニーシ（Cinisi, またはCinisio, シチリア, パレルモ県）でも重税に抗議するデモ隊がバリケードを作る事件が生じた。シチリア島では1月5日にカニカッティ（Canicatti, アグリジェント県）、トラーパーニ（Trapani, トラーパニ県）でも、家畜税廃止などを要求する反税デモがおこった。<sup>13)</sup>

1月4日、レッジョ・エミリア（Reggio Emilia, エミリア・ロマーニャ州レッジョ・エミリア県）では、農業日雇労働者と失業者の「パンと労働」を求めるデモが行われ、社会党系の市長は騒乱を恐れて、公共事業労働の約束をした。同じくエミリア・ロマーニャ州のフォルリ（Forli, フォルリ県）でも1月16日に「パンと労働」のデモ隊が官憲と衝突した。

プーリア州では、1月4日にサンテラーモ（Santeramo, バーリ県）で、農民が公有地分割を要求するデモを行い、1月8日には、モンテメソーラ（Montemesola, タラント県）、ジノーザ（Ginosa, タラント県）、メサーニャ（Mesagna, バーリ県）で「パンと労働」のデモがおこった。

1月10日、モンテスカリオーズ（Montescaglioso, バジリカータ州マテーラ県）では、農民600名以上のデモ隊が地方裁判所と登記簿収蔵所を襲って書類を焼き払ったため、歩兵が出動して80名余を逮捕した。<sup>14)</sup> 同日レッジョ・カラブリア（Reggio Calabria, カラブリア州レッジョ・カラブリア県）でも反税デモがおきた。

1月15日、マルケ州アンコーナ（Ancona, アンコーナ県）では、パン価格が1キログラム当たり50チェンテージミにも高騰したため、女性や子供を多く含む抗議デモが行われた。パン価格の高騰には当地の穀物市場での投機的な買い占めの影響が大であった。パン価格引き下げと小麦粉の地方消費税の廃止を要求する民衆のデモは16日、17日と続き、17日にはデモの女性や子供達が官憲に投石する事件も起きた。1月18日、アンコーナでは、アナーキストが影響力を持っていた港湾労働者を先頭に民衆多数が一斉に街頭デモに出た。デモ隊の中には「アナルキア万歳、社会革命万歳」と叫ぶ人々もいた。歩兵5個中隊と騎兵2個大隊が鎮圧に出動し、カプール広場で集会を開いていた著名なアナーキストのマラテスタ（Errico Malatesta）と社会党のボッコニー（Alessandro Bocconi）を逮捕した。しかし蜂起は収まらず、民衆は通信用電線を切断して路上に張って騎兵の行動を妨げるなどして抵抗した。翌1月19日には1,000名余の民衆がアンコーナ市内の穀物商で投機家のガリアルディ（Gagliardi）

の邸宅を襲い、略奪し放火した。<sup>15)</sup>

マルケ州では1月18日、19日に各地で民衆反乱が起こった。セニガッリア (Senigallia, アンコーナ県) では、アナーキストを先頭に、民衆が穀物倉庫と穀物輸送列車を襲って略奪し、市長がパン価格引き下げ命令を出した。オジモ (Osimo, アンコーナ県) でも貴族の穀物商の倉庫が略奪され、イエージ (Jesi, アンコーナ県)、マチェラータ (Macerata, マチェラータ県) でも騒乱が生じた。1月20日、キアラヴァッレ (Chiaravalle, アンコーナ県) では、女性を先頭にして、「社会革命万歳」「国王万歳」と叫ぶ1000名のデモ隊が官憲と衝突した。1月20日、マルケ州に戒厳令が布告され、バルディッセーラ將軍麾下の軍隊が出動して民衆を鎮圧した。マルケ州ではアンコーナ他の事件で、後に243名が起訴された。<sup>16)</sup>

1898年1月23日、ルディニー (Antonio Rudini Starabba, marchese di, 1839年生～1908年没) を首相とする政府は、穀物関税をそれまでの100キログラム当たり7.5リラから5リラへと引き下げ、これを4月30日より実施すると発表した。これは穀物市場での投機への対策であったであろうが、パン価格引き下げのための緊急対策としては有効ではなかった。

1月24日、ヴォルトリ (Voltri, リグリア州ジェノヴァ県) では、ある綿紡績工場から解雇された250人の労働者のデモが官憲と衝突して、死者2名が出た。

1月28日、ラヴェンナ (Ravenna, エミリア・ロマーニャ州ラヴェンナ県) では、ポー川の堤防工事に2000名の労働者を募集したところ、1万人の応募者が集まって騒動になりかけたが、当地の社会党の幹部などが大衆を説得して騒乱にならずにすんだ。

1898年2月1日、サヴィニャーノ (Savignano sul Rubicone, エミリア・ロマーニャ州フォルリ県) では、パンの量をごまかしたパン屋を女性や子供たちが襲った。同じく1日、トッレアンヌンツィアータ (Torre Annunziata, カムパーニア州ナポリ県) でも失業者のデモが騒乱となった。

2月3日、ペルーギア (Perugia, ウムブリア州ペルーギア県) では、失業者を中心とする1,000名の「パンと労働」を求めるデモ隊が官憲と激しく衝突し、軍隊が出動した。2月4日、フィナーレ・エミーリア (Finale Emilia, エミリア・ロマーニャ州モデナ県) やポルトフェッライオ (Portoferraio, トスカナ州, エルバ島) でも「パンと労働」のデモが官憲と衝突し、同様の事件は2月13日にルーゴ (Lugo, エミリア・ロマーニャ州ラヴェンナ県)、2月16日にパレルモ (Palermo, シチリア, パレルモ県) でもおこった。

1898年2月18日、仕事のない冬の季節にトロイナ (Troina, シチリア, エンナ県) では、飢餓に襲われた農業労働者と女性・子供たちが、雪の降る中、鋤や斧を持って市役所を襲撃して破壊した。軍隊2個中隊が出動して発砲し、民衆5名が死亡、7名が重傷を負い、軍隊側にも負傷者が出た。この事件は「トロイナの悲劇」として全国に報道されたが、社会党機関紙は「社会主義はトロイナを否認する」というコメントを出した。<sup>17)</sup>

2月22日、モーディカ（Modica, シチリア, ラグーザ県）では、音楽劇場の落成式に集まった民衆が市役所と市長邸にデモをかけ、軍隊の発砲で5名が死亡した。2月下旬には、エミリア・ロマーニャ州のモリネッラ（Molinella）などボローニャ県、フェッラーラなどフェッラーラ県で農業労働者のストライキのアジテーションが始まり、また各地で「パンと労働」を求める失業者のデモもたびたび行われた。

## 註

- 12) Giuseppe Galzerano, Gaetano Bresci. La vita, l'attento, il processo e la morte del regicida anarchico, Galzerano, Salerno, 1988, p.28.
- 13) Del Carria, op.cit., pp.300-303.
- 14) Domenico Sacco, Socialismo riformista e Mezzogiorno. Questione agraria, istruzione e sviluppo urbano in Basilicata in età giolittiana, Lacaita, Manduria, 1986, p.118.
- 15) Fabio Fabbri, I moti del 1898, Nuova Italia, Firenze, 1975, pp.8-9.
- 16) Giuseppe Barbalace, Fabbrica e Partito socialista negli anni Novanta (Il caso delle Marche), Argalia, Urbino, 1976, pp.194-196. および, Del Carria, op.cit., pp.302-303.
- 17) Del Carria, ibidem, p.304.

## IV. 1898年3月・4月

1898年3月2日、ポルトマッジョーレ（Portomaggiore, エミリア・ロマーニャ州フェッラーラ県）では、ストライキ中の農業労働者と官憲の衝突がおきた。

3月6日、急進黨下院議員で「民主主義の吟遊詩人」のあだ名をもつカヴァッロッティ（Felice Cavallotti）が保守派の下院議員との決闘で死亡した。3月8日にカヴァッロッティの葬儀と追悼集会が全国各地で多数の民衆を集めて行われ、ローマ（Roma）やヴェネツィア（Venezia）などでは集会参加者と官憲との衝突がおきた。<sup>18)</sup>

3月7日、ヴィットリア（Vittoria, シチリア, ラグーザ県）では、反税デモの民衆が市役所、登記所、税務署などに投石し、官憲と衝突した。シチリアでは3月前半に、カステルヌオーヴォ（Castelnuovo, パレルモ県）、カロニアマリーナ（Caronia Marina, メッシーナ県）、マルヴァーニャ（Malvagna, メッシーナ県）、アデルノ（Aderno, カターニア県）などで反税または「パンと労働」のデモが騒乱となり、3月15日、カニカッティでは、穀物を当地から他の地方へ移すのを阻止しようという民衆のデモが行われた。

3月17日、アルジェンタ（Argenta, エミリア・ロマーニャ州フェッラーラ県）では、農業労働者たちがストライキ中に逮捕された仲間を釈放させようとして警察に投石する事件がおきた。3月20日、ズグルゴラ（Sgurgola, ラツィオ州ローマ県）では、「国王万歳、役人く

たばれ」と叫ぶデモがあった。

この3月には、モリネッラで稲作労働者1万2千名の大ストライキが始まり、この争議中に男女多数の労働者が逮捕され、またピエツラ（Biella, ピエモンテ州ピエツラ県）でも毛織物労働者の大規模なストライキがおこり、ヴェネト州などポー川下流の各地でも農業ストが多発した。

1898年4月19日、アメリカ・スペイン戦争の勃発とともにアメリカ産小麦の対ヨーロッパ輸出が一時急減し、さらに投機によって小麦価格が急騰した。それとともにパン価格も、3月には全国的に1キログラム当たり35チェンテージミ位であったものが、45チェンテージミ以上するのが普通の情勢となり、一部の都市では55ないし60チェンテージミにも達した。<sup>19)</sup>

4月中旬、ポー川流域各州やマルケ州など全国各地で農業労働者のストライキが活発化し、またピアチェンツァ（Piacenza, エミリア・ロマーニャ州ピアチェンツァ県）などでは建築労働者もストライキに入り、コミーティ（Comiti, シチリア, アグリジェント県）などでは硫黄鉱山労働者のストライキがおこった。

4月25日、ファエンツァ（Faenza, エミリア・ロマーニャ州ラヴェンナ県）では、女性達を中心とする「パンと労働」のデモ隊が市庁舎に侵入し、軍隊と衝突し、翌26日には民衆が地主・穀物商の邸宅を破壊した。

4月27日、プーリア州のバーリ（Bari, バーリ県）ではパン価格が1キログラム当たり46チェンテージミに上がり、女性を先頭にする2,000人の民衆がパン価格高騰抗議デモを行い、さらに市役所、税務署、関税事務所、警察署を襲撃し、港湾の倉庫を略奪した。労働者はゼネストを宣言し、市長はパンにかかわる地方税を一時撤廃した。県知事の要請で近隣諸都市から軍隊が急遽集められ、翌4月28日にバーリ県に戒厳令が布告され、1,500人が逮捕されて、市内は静かになった。このバーリ市の蜂起に続いてバーリ県では4月28・29日に、モドゥーニョ（Modugno, 当地では農民一名が死亡した）、ビトント（Bitonto）、パロデルコッレ（Palo del Colle）、トリッジャーノ（Triggiano）、トラニ（Trani）、ルティリアーノ（Rutigliano）、ジョヴィナッツォ（Giovinazzo）、グルモアップア（Grumo Appua）などで民衆が役所や穀物倉庫などを襲撃する事件がおこった。<sup>20)</sup>

4月28日、同じくプーリア州のフォッジア（Foggia, フォッジア県）では、民衆が女性を先頭にして、税務署、登記所、パン屋、製粉所などを襲撃し、市長はパン価格の30チェンテージミへの引き下げ命令を出した。フォッジア県では、ルチェラ（Lucera）、ガルガーノ地方（Gargano）、チェリニョーラ（Cerignola）でも民衆が役所を襲撃する事件がおこった。

4月28日から4月末にかけて、アブルッツィ・モリーゼ州でも民衆が役所などを襲撃する事件が、カムボッソ（Campobasso）、ペスカーラ（Pescara）、キエーティ（Chieti, 以上カムボッソ県）、テラーモ（Teramo, テラーモ県）などでおきた。

4月29日、カムパーニア州のアヴェルサ（Aversa, ナポリ県）では、民衆が税関事務所を襲い、市長はパン価格を10チェンテージミ引き下げる命令を出した。ナポリ（Napoli, カムパーニア州ナポリ県）では翌30日、パン価格が55ないし60チェンテージミにも上昇したため、二人のアナーキスト、デルジューディチェ（Francesco Del Giudice）とカコッツァ（Francesco Del Cacozza）が女性を多く含む民衆の先頭に立って県知事と交渉し、パン価格引き下げ命令を出すことを約束させた。この後二人のアナーキストは逮捕されたが翌日釈放され、さらに5月12日にまた逮捕された。<sup>21)</sup> 4月30日、ナポリ県のポルティチ（Portici）ではパン価格高騰に抗議するデモ隊が官憲と衝突して死者1名が出た。4月30日、サレルノ（Salerno, サレルノ県）では、パンの無料配給の際に、「恵みはいらない、仕事を与えよ」というデモがおきた。同日にはナポリ県のサンジョヴァンニアテドゥッチオ（San Giovanni a Teduccio）、トッレアンヌンツィアータ、ジュリアーノ（Giuliano）、ポンティチェッリ（Ponticelli）、カステッラママーレ（Castellammare）、グラニャーノ（Gragnano, 以上ナポリ県）、およびカムパーニア州のサンタマリアカプアヴェテレー（Santa Maria Capua Vetere, カゼルタ県）、ベネヴェント（Benevento, ベネヴェント県）などでパン価格抗議デモと、民衆と官憲との衝突事件がおきた。

## 註

18) Del Carria, ibidem, p.305.

19) Levra, op.cit., pp.82-83.

20) Del Carria, ibidem, p.307.

21) Nunzio Dell'Erba, Giornali e gruppi anarchici in Italia 1892-1900, Angeli, Milano, 1983, pp.128-129.

## V. 1898年5月

1898年5月1日、メーデーに備えてイタリア各地で軍隊が警戒体制をとった。ナポリでは駅など市内各所に22門のカノン砲が置かれ、ナポリ港の軍艦も戦闘配備についた。<sup>22)</sup> このなかでのナポリのメーデーでは、デモ隊と官憲の衝突で負傷者2名がでた。5月1日、プーリア州モルフエッタ（Molfetta, バリ県）では、鎌や農機具を持った農民が税関事務所やブルジョアの邸宅を襲撃し、軍隊の発砲で農民5名が死亡した。しかし反乱は収まらず、5月5日まで軍隊と民衆の衝突が続いて、農民2名が死亡した。

5月2日、プーリア州バリ県のミネルヴィーノムルジェ（Minervino Murge）では、パン価格が一時1キログラム当たり80チェンテージミにも高騰した。パン価格高騰抗議のデモ

隊は官憲と衝突し、製粉所を破壊し、さらに刑務所を襲って囚人を解放し、電報局を占拠し、穀物商の邸宅数軒を襲撃し、穀物商1名と医師1名（この医師はその前にデモ隊を銃で撃った）を殺害した。当地では軍隊の発砲によって民衆5名が死亡した。<sup>23)</sup>

同じく5月2日、トスカナ州フィレンツェ県のフィリーネヴァルダルノ（Figline Valdarno）では、鉄道建設労働者200名を先頭に民衆が穀物倉庫を襲撃した。また一団の青年達が射撃場に侵入して、標的射撃用の銃11丁と弾丸100発を奪い、官憲と撃ち合って、侵入者のうちの1名が死亡し、治安警察官1名が重傷を負った。<sup>24)</sup>

5月2日、エミリア・ロマーニャ州のパルマ（Parma, パルマ県）では、コルセット女工200名を先頭に、民衆が製粉所を略奪し、市内にバリケードを作って官憲と衝突した。同日、同州のパニャカヴァッロ（Bagnacavallo, ラヴェンナ県）では、官憲との衝突で民衆側に死者3名が出た。同日、サントラルカンジェロ・ディロマーニャ（Sant'Arcangelo di Romagna, フォルリ県）では、農業日雇労働者のデモが官憲と衝突して、労働者1名が死亡した。同日、同州のチェゼーナ（Cesena, フォルリ県）、イモラ（Imola, ボローニャ県）でも騒乱が生じた。

5月3日、マルケ州のペーザロ（Pesaro, ペーザロ県）では、ストライキ中の港湾労働者がゼネラルストライキを宣言し、「革命万歳」と叫びながらデモを行い、製粉所等を襲い、軍隊官憲と衝突して、多数の負傷者が出た。マルケ州では同日、アスコリピチェーノ（Ascoli Piceno, アスコリピチェーノ県）でも民衆と官憲の衝突で負傷者が出た。<sup>25)</sup>

5月4日、ピアチェンツァでは、民衆と官憲の衝突で製靴工など2名が死亡した。同日、ナポリ県のトッレアンヌンツィアータでは、いくつかの製粉所が民衆に襲撃された。

5月4日、政府は、穀物輸入関税を6月30日まで停止すると発表した。

パヴィーア（Pavia, ロムバルディーア州パヴィーア県）では、既に5月3日から48チェンテージミに上がったパン価格の引き下げを求めるデモが行われており、労働団体や社会党の統制によってかろうじて平静が保たれていたが、5月5日になって民衆と軍隊との激しい衝突がおこった。民衆は市庁舎を攻撃し、軍隊に投石し、電信線を切断して路上に張って騎兵の突撃を妨害するなどして抵抗した。軍隊の発砲によって、労働者1名とパヴィーア大学生ムッシ（Muzio Mussi）が死亡した。同じく5日、ソレジーナ（Soresina, ロムバルディーア州クレモナ県）では、民衆がパン屋14カ所などを襲撃し、バリケードを作り、官憲・軍隊に屋根から瓦を投げるなどして抵抗し、製糸女工1名とカラビニエーリ1名が死亡した。この日ロムバルディーア州ではローディ（Lodi, ミラノ県）、ヴァレーゼ（Varese, ヴァレーゼ県）でも騒乱がおきた。

5月5日、トスカナ州セストフィオレンティーノ（Sesto Fiorentino, フィレンツェ県）では、労働者と女性達のパン価格高騰抗議のデモ隊が、逮捕された仲間を釈放させようとして

官憲と衝突し、官憲の発砲で、9歳の少年を含む4名が死亡した。<sup>26)</sup>

北部の大都市トリノでは、5月2日にパン価格が1キログラム当たり46チェンテージミに上がり、労働者の抗議集会が開かれた。5月3日、社会党の下院議員モルガリ (Oddino Morgari) らの指導者は、集会・デモでの民衆の暴発を恐れて、パン価格を30チェンテージミ以下にするように市長に陳情するという行動方針をとった。5月4日、ストライキ中のパン焼き工を中心に多数の労働者がパン価格高騰抗議のデモを行い、翌5日もデモが行われたが、この期間を通じて数名が逮捕されただけで、トリノでは概して平穏であった。<sup>27)</sup>

## 註

22) Fabbri, op.cit., p.10.

23) Del Carria, op.cit., p.310.

24) Levra, op.cit., p.98. および, Galzerano, op.cit., p.29.

25) Del Carria, op.cit., p.312.

26) Luigi Tomassini, *Associazionismo operaio a Firenze fra '800 e '900. La società di mutuo soccorso di Rifredi (1883-1922)*, Olschki, Firenze, 1984, p.91.

27) Pier Paolo Bellomi, *Lotte di classe, sindacalismo e riformismo a Torino 1898-1914*, in A. Agosti e G.M.Bravo (diretta da), *Storia del movimento operaio del socialismo e delle lotte sociali in Piemonte*, vol.I, De Donato, Bari, 1979, pp.46-48.

## VI. ミラノ事件

1898年5月6日の正午頃、ミラノの中央駅の南にあるピレッリ工場の門前で、サヴィオ (Guglielmo Savio, 17歳, 機械工) という社会党系の活動家が、昼休みで工場から出てきた労働者に社会党のアピールを印刷したビラを配って、治安警察官に検挙された。さらにアマディオ (Angelo Amadio, 20歳) という労働者が「革命万歳」と叫んで警官に投石して逮捕された。近くの工場からも出てきた労働者達が集まって、労働者の逮捕に抗議し、騒ぎが大きくなってきた。サヴィオはまもなく釈放されたが、アマディオは近くの警察の分署に留置された。<sup>28)</sup>

夕方4時半頃、ミラノ出身の社会党下院議員のトゥラーティ (Filippo Turati) とロンダーニ (Dino Rondani) がやってきて労働者達をなだめ、さらに二人はアマディオの釈放工作のために出かけた。夕方6時、工場の終業とともに多数の労働者がピレッリの門前に集まってきた。トゥラーティ達が戻ってきて、群衆にアマディオの釈放を約束し、さらにトゥラーティは「今日はその時ではないということに気づいてほしい。…敵の挑発に乗るな。私は諸君に平静をすすめる」という短い演説をした。集まった労働者達はいったん解散しはじめた。

しかし6時45分頃、アマディオが留置されていた警察分署の前に集まった1000人ほどの労働者が警察に投石をはじめた。治安警察はまず空に向けて拳銃を撃って民衆を追い払おうとし、その後再び民衆が押し寄せてきたのでこれに向かって発砲し、労働者1名が死亡し、また誤って治安警察官1名（私服であったかどうか不明）が射殺され、民衆5名が負傷した。そして軍隊が駆けつけてきて、銃剣で民衆を追い散らした。民衆の一部は死亡した労働者の遺体を荷車に乗せ、葬列を作って、ドゥオーモを通して北の記念墓地へ運んだ。この夜、市の中心部のガッレリアでは、民衆が集まって議論し、労働賛歌や共和国賛歌を歌っていたが、ここにも軍隊が出動して何人かを逮捕し、民衆を追い払った。

翌5月7日の午前中、ピレリなどいくつかの工場では自然発生的にストライキとなり、人々がドゥオーモ広場に集まってきて、抗議集会が開かれた。一方ミラノ県知事は軍隊に治安出動を要請した。昼前、ポルタ・ヴェネツィアで民衆が市街電車や荷車などでバリケードを作りはじめた。正午頃、軍隊がこのバリケードにいた民衆に発砲して、死者1名が出た。まもなくドゥオーモの周りのコルソ・ティチネーゼ（ここではパヴィーア大学の学生約300人が中心となった）、ポルタ・ヴィットリア、ヴィア・モスコヴァ、ヴィア・カノニカなどの通りにもバリケードが築かれた。

午後4時頃、政府はミラノに戒厳令をしくことを決定し、命令によって直ちにバーバ・ベッカリス将軍（Fiorenzo Bava Beccaris）麾下の第三軍が出動した。軍隊は戦争さながらに発砲しつつ、まずドゥオーモ広場と中央駅などのいくつかの拠点を確保した。この夜戒厳令布告が公示され、夜間11時以後翌朝までの外出と集会が禁止され、反政府系の政党と労働団体のすべてに解散命令が出され、すべての新聞に発行停止命令が出された。この夜民衆は家に帰り、街は静かになった。

1898年5月8日（日曜日）の朝、民衆は武器らしい武器を持たずに広場やバリケードに集まった。これに対して軍隊が攻撃を開始し、軍隊はバリケードにカノン砲を撃ちこみ、投石する民衆に機関銃や小銃を撃ち続け、このため多数の死者・負傷者が出た。この時、家屋内の9歳の少年と3歳の幼児が死亡したが、これはカノン砲の砲弾がバリケードで炸裂せずに民家を直撃したためと考えられる。銃砲撃が始まると、民衆は武器を持たなかったからバリケードや通りから逃げ去ったが、なかには屋根から下の街路の軍隊に瓦を投げたり、歩兵と棍棒で闘う者もいた。8日の夕方には軍隊がほぼ市内を制圧し、5時40分に砲声は止んだ。

5月9日、朝から工場が操業を始めたが、これは軍の要請によるものであった。しかし街は平穏ではなく、民衆の街頭での抵抗はほとんど見られなかったが、軍隊と警察が反政府系政党・団体の指導者、また銃傷を負った者や反抗する者を逮捕するため、多くの家屋に立ち入って捜査を行っていた。この日トゥラーティなどの、民衆にひたすら平静を保つように呼びかけていた社会党の指導者も逮捕された。

5月9日正午頃、軍隊は、ドゥオーモの東800メートルのモンフォルテ通りのカプチン派修道院の建物から銃を撃った者がいると誤解して、修道院の石塀を砲撃し、修道院内にいた修道士60名を逮捕した。また軍隊は、この近くを偶然通りかかった労働者1名を射殺した。

このミラノ事件の4日間の死者・負傷者は、公式報告では、民衆側の死者80名、負傷者450名、軍隊・警察側の死者2名（1名は5月6日の誤射による、他の1名は屋根が崩れ落ちたため）、負傷者48名であった。しかし、実際の死傷者はもっと多く、民衆側の死者は118名以上といわれる。<sup>29)</sup>

## 註

28) ミラノ事件の記録はほとんど、Canavero, op.cit., pp.162-186. による。

29) Levra, op.cit., p.186.

## VII. 1898年5月6日以後

5月6日、トスカナ州では、前日のセストフィオレンティーノの民衆反乱に連帯して、フィレンツェの北のリフレディ（Rifredi, フィレンツェ県）の労働者が、軍隊の移動を阻止するためにリフレディ駅で鉄道の運行を妨害し、官憲と衝突した。同日フィレンツェ市内でも、建築労働者の失業者の「パンと労働」のデモに民衆が加わって巨大になり、これに官憲が発砲して、死者2名、負傷者20名を出した。<sup>30)</sup>

5月6日、トスカナ州の港町リヴォルノ（Livorno, リヴォルノ県）では、繭倉庫の労働者を中心にした民衆が、パン価格を1キログラム当たり30チェンテージミに引き下げるように要求するデモを行い、官憲と衝突した。民衆は親政府系の新聞社2社を襲い、市電を止めてバリケードを作った。アンサルド造船所などの工場労働者はゼネストに入った。翌5月7日、リヴォルノの民衆反乱は続き、軍隊が武力鎮圧に出動し、民衆がこれに投石で抵抗して、民衆側に死者3名（一説に6～8日の間に死者5名）が出た。<sup>31)</sup>

トスカナ州プラート（Prato, フィレンツェ県）では、毛織物工場の労働者を中心とする民衆が、「人民を飢えさせる者はくたばれ」と叫びながらデモを行い、さらに穀物倉庫、関税事務所を襲撃し、軍隊・警察と激しい衝突を繰り返した。ゼネストと反乱は5月9日まで続き、民衆側に数十名の負傷者（うち数名が死亡したといわれる）が出た。

5月8日、ポンテデーラ（Pontedera, トスカナ州ピエーザ県）では、失業者のデモ隊が軍隊と衝突し、5名の死者が出た。<sup>32)</sup> ロッカストラダ（Roccastrada, トスカナ州グロッセート県）では、アナーキストを先頭に民衆が「社会主義万歳、革命万歳、政府打倒」と叫びなが

らデモを行い、富豪の邸宅などを破壊した。トスカーナ州ではこのほかに、ピーザ（Pisa, ピーザ県）、ピストイア（Pistoia, ピストイア県）、エムポリ（Empoli, フィレンツェ県）などの諸市で穀物倉庫襲撃などの事件がおこった。またグロッセート県南部のマレンマ（Maremma）地方の各地で、地主や農場管理人の家や藁への放火などの事件がおこった。

5月9日、フィレンツェ市および同県に戒厳令がしかれ、翌日トスカーナ州が戒厳令下におかれた。

5月7日、モンツァ（Monza, ロムバルディーア州ミラノ県）では、民衆が国王の離宮にデモをかけ、軍隊の発砲で死者3名を出した。同日、ウルビーノ（Urbino, マルケ州ペーザロ県）では、鉱山労働者がパン屋を襲撃するなどの事件がおこった。

ナポリでは、5月9日午前中にナポリ大学の中庭で、学生が中心となって、パヴィーアで殺害された大学生ムッシの追悼とミラノの兄弟達に連帯する集会が開かれた。集会で演説した社会党のアルトゥーロ・ラブリオーラ（Arturo Labriola）などは、民衆を刺激しないように言葉を選んで追悼演説を行った。しかし集会後、大学生を先頭にデモ隊が市内に出ると、たちまち赤旗や棍棒を持った港湾労働者や女性たちが加わって巨大になった。デモ隊は「ミラノの兄弟万歳、社会革命万歳、共和国万歳」などと呼びながら行進し、官憲・軍隊との衝突で死者1名が出た。この日の午後、市内には4カ所以上にバリケードが築かれた。5月10日、戒厳令が布告されたナポリでは、市内各所で民衆と軍隊との衝突がおこり、女性1名が死亡した。ナポリの監獄では囚人が反乱をおこして、銃火で鎮圧された。10日にはサンタマリアカプアヴェテレーレなどカムパニア州の各地で民衆と官憲の衝突がおこった。<sup>33)</sup>

ミラノ、フィレンツェ、ナポリの戒厳令以降、イタリア全土は約8万人の兵士と官憲によって警備され、すべての集会が禁止され、指導者多数が逮捕され、民衆運動は逼塞した。また全国各地の新聞のほとんどが短期間の発行停止、あるいは解散（89紙にのぼる）を命じられたため、記録に乏しい。しかしロムバルディーア州のパルマ県、フェッラーラ県、コモ県などの農業地帯での農業労働者のストライキは続行されており、官憲との衝突もおこった。バジリカータ州でも農業争議が続いており、ピチェルノ（Picerno, ポテンザ県）では、官憲の発砲で農民1名が死亡した（日時不明）。5月14日、アルバ（Alba, ピエモンテ州クネオ県）では、民衆が税務署を襲撃して、その後アナーキストなどが逮捕された。<sup>34)</sup>

## 註

30) Tomassini, op.cit., p.91.

31) Del Carria, op.cit., p.315.

32) Franco Bertolucci, *Anarchismo e lotte sociali a Pisa 1871-1901. Dalla nascita dell'Internazionale alla Camera del Lavoro*, Franco Serantini, Pisa, 1988, p.131.

33) Del Carria, op.cit., pp.316-317.

34) Galzerano, op.cit., p.31

## VIII. ミラノ軍事裁判とトゥラーティ

戒厳令が布告された地域で逮捕された民衆は、それぞれの地域の軍事法廷で裁判された。ミラノ、フィレンツェ、ナポリの三カ所の軍事法廷の判決を合計すると、禁固3,042年3カ月3日になる。すなわち、828名が起訴されて688名が有罪となったミラノ軍事法廷では、1,435年8カ月と1日の禁固刑と29,160リラの罰金、フィレンツェでは1,156年6カ月10日の禁固刑と100,591リラの罰金、ナポリでは450年22日の禁固刑と23,777リラの罰金である。またバリでも軍事裁判が行われ、その他の地方でも多くの逮捕者が一般の裁判所に起訴された。<sup>35)</sup>

1898年6月14日のミラノ軍事法廷の判決では、ミラノ事件の発端となったピレリ工場門前でピラを配って検挙されたグリエルモ・サビオは、「法に従わず、階級間の憎悪をあおった」罪で禁固85日、また投石して逮捕されたアンジェロ・アマディオは禁固5年と監視3年の判決であった。<sup>36)</sup>

フィリッポ・トゥラーティ（39歳）は、同じミラノ選出の共和党下院議員デアンドレイス（Luigi De Andreis, 41歳）、トリノ選出の社会党下院議員オッディーノ・モルガリ（33歳）と同じグループで審理された。三人に共通の起訴理由は、彼らは国家の政体と政府の形態を暴力的に変革しようとする破壊的政党の頭目であって、その目的を達成するために、大衆集会、各党の委員会、労働組合等においてさまざまな方法で活動してきたが、その結果がこのたびのミラノその他の事件であったということである。またトゥラーティには、5月6～9日にミラノで生じた破壊と略奪に直接・間接に責任があり、内乱を扇動したという起訴理由もある。<sup>37)</sup>

このような起訴理由に対してトゥラーティは、イタリア社会党は合法的・改良的プログラムを追求する政党であり、起訴理由は全くの虚偽であると反論した。また彼は、5月6～9日の間の行動について、自分は民衆を扇動したことはなく、ミラノ中央駅では、鉄道ストは公権力の介入を招くから中止するように鉄道機関士労働組合の幹部を説得しようとしたし、バリケードには軍隊に阻まれるからとうてい行けるものではないと弁論した。（判決文では明白ではないが、トゥラーティ達の直接の責任、すなわち5月6～9日の間の扇動・指揮・率先助勢などは認められなかったもののようである。）

そしてトゥラーティは次のように述べた。「…我々は、手段無く、武器無く、準備無しに革命を行おうとする愚か者ではない。私の著作に書いてあるように、バリケード戦術がいかなる価値もないのと同様に、〈広場の革命〉は現代ではバカげている。我々社会主義者は、ゆっ

くりした平和的革命を望み、そして我々すべてが〈広場の革命〉に反対している。」<sup>38)</sup>

この審理グループの判決は、三名ともに禁固および公民権停止12年であった。要するに軍事裁判すなわちルディニー政権の論理は、社会党、共和党、急進党、アナーキスト、カトリック非妥協派などの反政府政治勢力が、長年にわたり民衆を悪しく導いてきたから、今度のような暴動がおきたのであって、だから民衆暴動の責任は反政府政治勢力にあるということであり、個々の指導者の具体的行動と反乱事件との直接的・具体的関係は立証されなくてもよいということであった。

## 註

35) Levra, op.cit., p.157.

36) Ferdinando Cordova, Democrazia e repressione nell'Italia di fine secolo, Bulzoni, Roma, 1983, pp.89-92.

37) Ibidem, p.122.

38) Franco Livorsi (a cura di), Filippo Turati. Socialismo e riformismo nella storia d'Italia. Scritti politici 1878-1932, Feltrinelli, Milano, 1979, pp.86-89.

## IX. 総括

1898年の民衆反乱の実態は、多くの場合、各地で民衆が「パンと労働」「税金廃止」と叫んでいたことからわかるように、大衆の貧困とパン価格の高騰、そして生活水準に比較しての高い税金という条件があり、民衆は日々の生活を守るために「パンと労働」「税金廃止」の要求を地方および中央政府に受け入れさせようとしてデモを行い、政府は民衆の運動を押さえ込もうとして、民衆と官憲・軍隊の衝突がおこったというものである。

いくつかの地域でアナーキストが先頭に立って民衆を率いたこともあるが、全体としては自然発生的であり、政治権力を奪取して新しい政府を作ろうとするという意味での計画的な革命行動ではなかった。しかし民衆の精神には、現在の社会を変えたいという強い希求があった。

それにしても、どうしてこれほどまでに民衆が過激であったのか、身の危険を省みず、官憲・軍隊に投石だけの武器で立ち向かっていったのかは、政権をとっていたルディニー首相達にも、トゥラーティ達社会党の指導者にも、パン価格の高騰に対する民衆の怒りと反撃であるということ以上には、よく分からないことであった。1898年のイタリアにおきた全国的な民衆反乱は、他の歴史的イベントと同じく、なぜそうなったのかという疑問を後世に残した。

## I moti del popolo italiano nel 1898

Ryusaku YOKOYAMA

La causa diretta dei moti del popolo italiano nel 1898, in molto caso, è la protesta per il aumento del prezzo del pane, la disoccupazione e la tassa dura. Il popolo si dimostrò al grido di "Pane e lavoro" e "Abolizione di tassa" e si scontrò con la forza pubblica.

La lista dei gravi incidenti dei moti o tumulti del popolo che scoppiò numerosamente dal gennaio al maggio del 1898 è sotto.

1 gennaio a Siculiana (Sicilia Agrigento), ucciso 1 persone.

15 gennaio a Ancona (Marche); 20 gennaio lo stato d'assedio a Ancona.

24 gennaio a Voltri (Liguria Genova), uccisi 2 persone.

18 febbraio a Troina (Sicilia Enna), uccisi 5 persone.

22 febbraio a Modica (Sicilia Ragusa), uccisi 5 persone.

27 aprile a Bari (Puglia); 28 aprile lo stato d'assedio a Bari. 1 - 5 maggio a Molfetta (Bari), uccisi 7 persone. 2 maggio a Minervino Murge (Bari), uccisi 7 persone.

2 maggio a Figline Valdarno (Toscana Firenze), ucciso 1 persone.

2 maggio a Bagnacavallo (Emilia-Romagna Ravenna), uccisi 3 persone. 3 maggio a Sant'Arcangelo di Romagna (E-R Forlì), ucciso 1 persone. 4 maggio a Piacenza (E-R), uccisi 2 persone.

5 maggio a Pavia (Lombardia), uccisi 2 persone; a Soresina (Lombardia Cremona), uccisi 2 persone.

5 maggio a Sesto Fiorentino (Toscana Firenze), uccisi 4 persone. 6 maggio a Firenze (Toscana), uccisi 2 persone. 6 -7 maggio a Livorno (Toscana), uccisi 3 persone. 8 maggio a Pontedera (Toscana Pisa), uccisi 5 persone. 9 maggio lo stato d'assedio a Toscana.

6 - 9 maggio a Milano, uccisi 118 persone. 7 maggio lo stato d'assedio a Milano.

9 - 10 maggio a Napoli, uccisi 2 persone. 10 maggio lo stato d'assedio a Napoli.

Il governo Rudini e anche Filippo Turati del Partito Socialista Italiano non capirono il desiderio vero del popolo. Il poplo italiano volle la trasformazione sociale radicale.